

シンポジウム 1：これからの認知症ケアと在宅医療

演題名	認知症初期集中支援を経験して ー地域の多職種専門チームによる新たな認知症ケアー
-----	--

概要

高齢化の進行とともに認知症を持つ方の数も急増しており、現在 460 万人を越えたという。専門医だけでは到底対応しきれない状況に対して、その診療やケア体制、介護負担、かかる費用なども含めて大きな社会課題に発展している。厚労省は 2013 年から認知症施策推進 5 カ年計画、通称「オレンジプラン」を実施し、対策を急いでいる。そこに掲げられた様々な施策の中で特に注目されているのは「認知症初期集中支援」という取り組み。認知症ケアに専門的な知識と経験を持つ看護師や作業療法士、臨床心理士などからなる専門チームが、患者宅にアウトリーチ（訪問）し、現在の症状や生活状況などのインタビューを行い、認知症の状態や介護負担のアセスメント、アクションプランの策定と実施により、ご本人や家族、地域のケアスタッフを支援するというものである。特に比較的早期の段階で関わることにより、本人の意思決定支援や家族への心理教育を行い、なるべくその方が住み慣れた自宅や地域で暮らし続けられることを実現することにより、不用意な対応の結果として生じる行動心理症状の発現が抑えられ、介護負担が軽減し、予後を改善するという効果を期待されている。

当院では 2013 年から全国 14 カ所で実施されたこのモデル事業を世田谷区から請け負い、地域包括支援センターと協力して実践する機会を頂いた。既に 30 例を超えるケースを経験し、このサービスの有効性を実感するとともに、適応ケースの抽出やアセスメントの標準化、精神疾患との鑑別、ご家族やケア提供者への心理教育、ソーシャルワークの必要性など様々な課題もみえてきた。

シンポジウムでは、認知症初期集中支援事業について、より具体的なケースワークの実際も含めて、我々の取り組みを報告する。